

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

タイトル：「契丹語・契丹文字研究の新展開」（平成24年度第3回研究会）

日時：平成25年2月2日（土曜日）午後13時30分より午後18時

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304号室

報告者名（所属）：

#### 1) 荒川慎太郎（AA研）

「故西田龍雄先生と契丹文字研究」

2012年9月26日、83歳で逝去された故西田龍雄先生の、契丹文字・契丹語に関する研究を振り返った。

西田先生は、西夏文字西夏語、過去から現在までのチベット・ビルマ諸語の研究で世界的な権威として知られる。古代から現代までのアジアの諸文字、とりわけ、契丹・西夏・女真文字の「疑似漢字」に関する深い関心をお持ちであった。ご遺稿からは、西夏文字に次いで関心があったのは契丹小字ではなかったかと伺い知ることができる。

本報告では、1) 契丹文字の研究と、2) 契丹文字に関する学際的活動の二面から、先生のご業績を紹介した。

1980年代以降、西田先生は、契丹文字の研究と、中国の研究者による解読の成果の公開を行われた。中国の諸研究の紹介は、1985年の『契丹小字研究』（中国社会科学出版社）に先立つ1981年、つまり1970年代後期の中国の諸研究をいち早く入手・検討されていたことは特筆すべきである。また、一般書の形で、契丹大字・小字のシステムをわかりやすく解説されたのも本邦の嚆矢といえよう。

90年代には、『日中合同契丹文字研究国際シンポジウム』（1991年5月京都）で準備委員会委員長、中国における国際研究集会『日中合同文字文化研究会』（1997年8月遼寧省）実行準備委員会委員長を務められ、先生ご自身もご論考を發表された。

現在、疑似漢字、契丹文字・契丹語を言語学的に研究する後学の徒は、何らかの形で西田先生の恩恵に浴していると言える。先生の遺徳を偲ぶと共に、ご研究を継ぎ、深化させることが求められている。

#### 2) 松川節（AA研共同研究員、大谷大学）

「プロジェクトの成果刊行物について」

本プロジェクトが実施されている2010年度～2012年度までの三年間を振り返り、当初の研究計画の達成度について、自己点検・評価した上で、現時点ですでに公刊されている成果の一端として、呉英喆（著）松川節・武内康則・荒川慎太郎（校閲）『契丹小字新発見資料積読問題』（2012年、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、272pp.）を紹介した。

3) 荒川慎太郎 (A A 研)・澤本光弘 (早稲田大学朝鮮文化研究所招聘研究員)・高井康典行 (早稲田大学非常勤講師)・渡辺健哉 (東北大学大学院文学研究科 専門研究員)

『契丹〔遼〕と10～12世紀の東部ユーラシア』について」

『契丹〔遼〕と10～12世紀の東部ユーラシア』編者4名により、同書に関する報告が行われた。{ }は『契丹〔遼〕と10～12世紀の東部ユーラシア』における執筆者。

渡辺は、総論として、本書の出版に至る経緯と、本書の意義と反省点、そして本書の出版を経たのちに浮かび上がってきた課題について報告した。本書の反省点として、用語などについては一定程度の統一感を持たせた方がよかったこと、皇帝の伝記に類するような原稿が得られなかったこと、北宋からの視点が打ち出せなかったことを挙げた。最後にこれからの課題として、社会や経済に注目した研究が必要ではないか、と述べた。なお、出版の経緯について、別個に動いていた渡辺と高井との双方の意図が、結果として本書によって結実したことが本研究会の場で確認されたことを付言しておく。

澤本は、出版社との交渉の発端と、編集方針が固まるまでの経緯について報告した。その上で、契丹を東部ユーラシアの視角からみる一例として、交通路に着目したことについて史料を用いて説明した。具体的には、契丹を訪問した宋の使節が書き残した『神宗皇帝即位使遼語録』を中心に紹介し、基礎的考察によって新たに判明した点の概要を述べた。また、版本の比較、記された路程の実地調査、数値地図を使った鳥瞰画像の作成などによる今後の研究の展開の見通しなどについて提起した。

荒川は契丹文字新資料について、その意義などを紹介した。契丹〔遼〕史ばかりでなく、契丹語及びモンゴル系言語の古層を知る上でも重要な資料が、契丹大字・小字資料である。西暦二千年代に入り、その質・量は飛躍的に潤沢なものになった。「質」とは、従来は墓誌が中心であった資料に、大字碑文 {松川・白石}、大字冊子写本 {荒川} が加えられたことであり、「量」とは、中国の新発見資料の急激な増加 {呉} である。これらを史料として用いるばかりでなく、契丹語の言語学的な解明 {武内} も進展が期待される。

高井は、まず本書の出版経緯について渡辺・澤本の説明についての補足を行い、つぎに研究の社会への還元としての本書の意義について報告した。本書に収録された論考は総論的なものと各論的部分なものに大別されるが、総論的部分は契丹〔遼〕史を中心に研究している研究者によって執筆され、その内容は各研究者の近年の研究成果の要約となっている。これら研究者は現段階において専著の形で近年の自己の研究を公表していないため、本書での記述は単なる研究の社会への還元にとどまらず、契丹〔遼〕史を専門とする人に対しても、自己の研究の総括を示す意義がある、と指摘した。また、契丹〔遼〕史は「北アジア」と「中国」という視点で論じられがちであるが、本書ではウイグルとの関係 {松井}、渤海との関係 {赤羽目}、日本との関係 {磯部} についての論考を配することにより、「東部ユーラシア」ひいては「世界史」の中に契丹〔遼〕史を位置づけるための手がかりを提示したことを指摘した。

4) 全員

遼、契丹に関する近年の研究に関する情報交換。本研究課題に関する総括などが行われた。